

遊戯会・運動会について思う



舟 木 哲 朗

幼稚園や保育所における行事のあり方については、いろいろと考えさせられることがたくさんある。

幼稚園や保育所の教育課程が行事中心あるいは季節中心であってはならないという批判は、すでに久しくいい続けられているが、このことが具体的にどのようなことを意味しているのかは、現場で必ずしも明確に理解されていない。また、そこから、行事がどのように考えられ、どのようにとり上げられるべきであるかも、現場では必ずしも正しくつかまれている。幼稚園教育要領では、「社会」の3の(6)に「幼稚園の行事に喜んで参加する。」というねらいをあげ、幼稚園における行事の一般的な考え方を示しているが、この場合、「幼稚園の行事」とは何かということについて改めて考えてみる必要がある。参考までに、小学校の教育課程は、各教科・道徳・特別教育活動・学校行事等の四領域で編成されているが、この場合の「学校行

事等」は「幼稚園の行事」という場合といくらか概念の相違があるけれども、ともかく、行事を何もかも取り上げるのではなくて、教育的に価値のあるものを精選することになっている。この態度は、幼稚園や保育所で他山の石とすべき一つの立場であろう。次に、小学校で「学校行事等」という一つの領域を設けているのと違って、幼稚園や保育所で取り上げる行事は、幼児の総合的な経験や活動の一つとしてのものである。そこで、行事の一般的なねらいは右にあげたとおりであるが、個々の行事については、このほかに、それぞれの行事固有のねらい（「社会」以外のねらいが多い）がこれに加えられることになる。

— このような前提に立って、標題のことについて簡単に述べてみよう。

— 幼児にとって楽しいものであること

「喜んで参加する」というねらいから考えて、これは当然のことである。このようなことを書くと、「今さら言わなくてもわかりきったことだ」という人があるかもしれない。はたしてそうであろうか。私はそうとは思わない。幼児をギセイにして、おとなのための「見せ物」になつてはいないか。そしてそのために、平素の保育とは何のゆかりもない演劇（劇遊びではない）や、小学校の三年生くらいでも無理と思われるような合奏や、ずいぶんむずかしい舞踊（リズム遊びではない）をたたき込んでいくことはないか。また、このことのために、練習の段階で、表現についての一つの型が教え込まれ、おぼえ込まれ、幼児の創造性とか、くふうといったことが無視されてはいないか。さらに、このような無理をしようとするために、幼児が思うように動いてくれないので、ヒステリックな態度で幼児に接していることはないか。そのほか、おとな本位の粉飾や装置をこらして、かえって幼児を不自由にしていないか。などなど、現状は問題だらけではないかと思う。娯楽機関の乏しい農山村では村民（おとな）のレクリエーションと考えられ、大都市の私立幼稚園では幼稚園の宣伝に利用されている場合さえあると聞いている。

しかし、このようなことは、必ずしも全部の幼稚園や保育所がそうだということではない。幼児中心に教育的に行なう努力を払っているところもたくさんある。ただ、いくら反省しても過

ぎるいうことはないので、たいせつな観点としてあげてみたわけである。そして、これから続いて述べることも、すべてここで述べたことからの発展であることに注意を向けていただきたいと思う。

総合的な教育の一環として考えること

教育課程が行事中心であることは好ましくないが、行事が教育的に精選されて運営されることになれば、それは教育課程のなかに正しく位置づけられなければならない。そしてそれは、とりもなおさず、幼稚園あるいは保育所における幼児の生活の「一コマであつて、他の教育内容と遊離した「とつてつけた」ようなものであつてはならない。

遊戯会や運動会のような行事は、どちらかといえば、それまでの幼児の学習（広義の）のまどめの意味をもっているが、ねらいについては、右にあげた一般的なもののほか、「音楽リズム」（遊戯会の歌・合奏・リズム表現などや、運動会のリズム表現など）「言語」（遊戯会の劇遊びなど）「絵画製作」（遊戯会や運動会に使う物の製作など）「健康」（運動会のいろいろな種目や遊戯会のリズム表現など）といったいろいろな領域から必要なものが取り上げられなければならない。そして、それらのねらいが総合された教育的な活動として展開されなければならないし、そのためには、その活動はその前の活動からの発展であ

るとともに、後の活動に発展するようなものでなければならぬ。やるべきがそのまま目的ではない。そのかげに、はっきりした教育的意図をもっていなければならない。

たとえば、劇遊びを取り上げるとすると、まず、何をしようかと話を持ち出し、幼児に意見を述べさせる。その結果「こぶとり」がよいということになったとする。(これは、今まで知っている話の中から一つを選ぶことで、今までの活動の発展である。)次に、相談によって役割を決める。(自分の意見を述べるとともに人の意見を聞く。また、おぼろげながらも自分の特徴や友だちの特徴を考える。)そして、役割に応じてやってみる。一方、どのようなものが必要かを話し合ってみる。作る。(この活動は、当然今までの製作活動の成果のうえに立つことになる。)そして、それを使ってやってみる。このようにして行なった劇遊びの結果が、後に続くいろいろな経験や活動に、今までよりも質の高い態度で取り組むことに役立つなら、それは成功であるといえる。

幼児の生活を乱さないこと

総合的な教育の一環として考えるということは、このような行事によって幼児が教育的成長を遂げるということではなければならない。技能的な結果だけに注意を向けていると、幼児の生活が乱れてしまうことがある。ことに遊戯会の練習などで、あ

るグループだけの指導や個人指導に気をとられて他の幼児が放任されたり、あるいは練習のために生活のリズムが狂ったりすると、幼児の生活態度が乱れてしまう。これでは、何のための行事かということになる。

おとなのための「見せ物」であったり、あるいは「行事のための行事」であったりすると、とかくこのような結果になってしまう。幼児をよりよく成長発達させるための、総合的な教育の一環として行なうものである、ということをお忘れてはならない。

おとなを教育すること

以上のことを考えて望ましい展開をしても、それを見るおとながよく理解してくれなければ、見る者に満足を与えることができないかもしれない。

そこで、私の幼稚園では、遊戯会(私の幼稚園では「お別れ会」と呼んでいる。)の開会に先立って、保護者に対して次のような説明を行なっている。

1 お別れ会はすべて幼児中心に運営している。どのようなものをやるか、どのようにやるかについても幼児の意見を尊重しているし、合奏などは幼児の話し合いに基づいて編曲したものもある。

「どんなにじょうずか」ではなくて「どんなに意欲的か」を

評価してもらいたい。

2 おとなと子どもとは、物の考え方や感じ方が違う。おとなの「ものさし」で見えることをせず、お別れ会をやっている間は、子どもの心になってもらいたい。

3 お別れ会は「見せ物」ではなく「教育」である。幼稚園における教育の一コマをお見せするものだから、はでなものではない。子どもが演ずるものなから、幼児の教育はかくあるべきものであるということをおくみ取ってもらいたい。

4 自分の子と他の子とを比較してとやかくいうのではなく、子どもが喜んで熱心にやっている様子を賞賛し、はげましてやってほしい。

なお、各種目ごとに簡単な解説を加え、その教育的な意図や見る場合の目のつけどころを話すことにしている。

その他のこと

取り上げる内容について、以上のような教育意図が必要であるが、そのほかにも考えておかなければならないことがいくらかある。それを次にあげてみよう。

1 幼児が喜んで参加するだけでなく、りっぱな態度で参加することも必要であろう。

具体的には、熱心にやること、入退場を秩序正しく速くやること、見ることもりっぱにできることなどがある。このよ

うなことがうまくできるためには、計画や内容や運営が幼児に向くものでなければならぬが、同時に、平素からの指導（習慣や態度）がたいせつであろう。

2 無駄な時間をおくことは、全体のふんい気をだれさせるものになる。

進行がスムーズに行なわれるよう、こまかい計画を立てておくことを忘れてはならない。ことに幼稚園や保育所では、幼児の管理に手がかかるのに人手が少なく、このような行事の運営には、いろいろと手ぬかりを生じやすい。気をつけなければならぬことである。

3 幼児の興味や忍耐力には限界がある。全体に要する時間について、無理のない計画を立てなければならない。

私の幼稚園では、お別れ会は開会から閉会まで（開会のあいさつ・閉会のあいさつを含む）の総所要時間を五十分でおさえている。過去の経験から、幼児が静かに坐っていることができず時間は三十分で、それを過ぎると態度が乱れてくるが、幼児自身（全員）が次々に出場するので、なんとか五分十分はたもてるからである。（少々無理かとも思うが）それ以上は、とても続かない。「静かにしなさい」と叱りながら続けるようなやり方はナンセンスである。運動会はすこし事情が違うので、今のところ午前九時過ぎから十一時までとして、これでよいか目下検討中である。